

宮崎県諸県方言の 「さみもさみ」構文について

永山紫風

1. はじめに

宮崎県には大きく分けて2種類の方言がある。北・中・南部と宮崎県のほとんどを占める「日向方言」と、西部の都城市・小林市・えびの市が主となっている「諸県方言」である（岩本1983）。しかし、瀬戸山（1974）は、「都城方言は言うまでもなく鹿児島方言の系統に属する」としている。これは、島津家が日向国（現在の宮崎県）と薩摩国・大隅国（現在の鹿児島県）の守護職に任じられて以降、その統治が約700年間も続いたことから、諸県方言は宮崎県というより鹿児島県寄りの言語的特徴を持っていることによる。

だが、瀬戸山（1974）は、「鹿児島方言と全く同一の方言は凡そ8、9割で、のちの1、2割は違っている。その内、約半分以上は、都城・諸県独特の方言でありそれ以外の流入借用のようである。（中略）語句だけでなく、アクセントも又、少しは鹿児島方言と違っている。」とも述べている。これに対する理由は述べられていないが、諸県方言を使用する都城市などは薩摩藩の本府である鹿児島からは距離的に遠く離れていることから薩隅方言とはまた違った発展を遂げたのではないだろうか。結局のところ、諸県方言は鹿児島県と宮崎県の狭間にあり、両方の特徴を併せ持って発展した方言であると言える。

そして諸県方言にしか見られない代表的な例が、「さみもさみ」（とても寒い）のように、意味を強める働きの重語表現である。この表現は諸県方言における一大特徴だと2節に示す文献で言及されているにも関わらず、これまでに詳細な研究の対象とされていないようである。そのため、本稿では、「さみもさみ」構文の意味や構造について明確にしていきたい。

なお、諸県方言が使用されている地域についてだが、これは各書でさまざまな解釈が見られた。本稿では以下に示す『新宮崎市方言辞典』の分類分けを参照することにする。

東諸県…綾町、国富町、高岡町…（多くは薩摩領）

西諸県…小林市、えびの市、野尻町、高原町、須木村…（旧薩摩領）
 北諸県…都城市、高崎町、高城町、三股町、山田町、山之口町…（旧薩摩領）
 「諸県」の記載は東・西・北諸の三者を含む（玉木・田代編，2006，p.6）

2. 先行研究

「さみもさみ」という重語表現について、瀬戸山（1974）は諸県方言独自の表現であり、形容詞や動詞の意味を強調する役割を持っているとしている。

都城・諸県方言の鹿児島とも異なる一大特徴は、強意の形容をなす場合、その形容詞を重ねるということである。例えば、サミモサミ（非常に寒い）ヌキモヌキ（非常に暑い）コエモコエ（非常に辛い）ネミモネミ（非常に眠い）（中略）などがあり、また、動詞を重ねて同様の効果を来す特徴がある。スペイモスペランカ（非常によく滑る）ハシイモハシランカ（非常によく走る）オラッモオラバンカ（非常によく叫ぶ）（後略）

（瀬戸山，1974，p.125）

さらに、「さみもさみ」構文について記述されていた8冊の文献¹に見られた例を挙げていく。なお、標準語訳は文献によってばらつきがあったが、本論文ではすべて「とても～」で統一している。

例	訳		
さみもさみ	とても寒い	といてもい	とても遠い
ぬぎもぬぎ	とても暑い	はえもはえ	とても早い
こえもこえ	とてもきつい	あいもあい	とても青い
ちけもちけ	とても近い	おじもおじ	とても怖い
つんでもつんて	とても冷たい	しりもしり	とても白い
ねみもねみ	とても眠い	とぜんねもとぜんね	とても寂しい
あけもあけ	とても赤い	ぬりもぬり	とてもぬるい
おしもおし	とても遅い	はがいもはがい	とてもはがゆい
かいかい	とてもかゆい	みごちもみごち	とても美しい
げんねもげんね	とても恥ずかしい	むじもむじ	とても可愛い

表1 「〔形容詞〕 + も + 〔形容詞〕」一覧

1 市園（1987）；桑畑（2011）；白坂（2016）；瀬戸山（1974）；早野（2011）；原田ほか（1982）；松永・上杉編（2000）；南日本新聞社編（1984）

例	訳		
ぬきもぬきねか	とても暑い	ちけもちけねか	とても近い
さみもさむねか	とても寒い	といもとおねか	とても遠い
こえもこえねか	とてもきつい	おしもおすねか	とても遅い
つんでもつんでねか	とても冷たい	はえもはえねか	とても早い
ねみもねむねか	とても眠い	あけもあけねか	とても赤い
おじもおずねか	とても怖い	しりもしるねか	とても白い
みごちもみごちねか	とても美しい	ういもうゆねか	とても多い

表2 「〔形容詞〕 + も + 〔形容詞の否定形 (-ネ)〕 + か」 一覧

例	訳
といもとらんか	とても取る
かっもかかんか	とても書く
ふいもふらんか	とても雨が降る
でくいもでけんか	とても出来る、とても成績が良い
すべいもすべらんか	とてもよく滑る
はしいもはしらんか	とてもよく走る
おらっもおらばんか	とてもよく叫ぶ
がいのがらんか	とても強く叱る
のんものまんか	とても多く飲む

表3 「〔動詞〕 + も + 〔動詞の否定形 (-ン)〕 + か」 一覧

これらの例の構造については以下ようになる。

「さみもさみ」: 「さみ」 + 「も」 + 「さみ」

→形容詞「寒い」の諸県方言・終止連体形「さみ」 + 係助詞「も」
+ 形容詞「寒い」の諸県方言・終止連体形「さみ」

「さみもさむねか」: 「さみ」 + 「も」 + 「さむね」 + 「か」

→形容詞「寒い」の諸県方言・終止連体形「さみ」 + 係助詞「も」
+ 形容詞「寒い」の諸県方言・否定形「さむね」 + 疑問の終助詞「か」

「すべいもすべらんか」: 「すべい」 + 「も」 + 「すべらん」 + 「か」

→動詞「滑る」の諸県方言・終止連体形「すべい」 + 係助詞「も」
+ 動詞「滑る」の諸県方言・否定形「すべらん」 + 疑問の終助詞「か」

このように、本稿が「さみもさみ」構文と呼ぶものは「A も A」の形が基となり、A には動詞か形容詞を当てはめられることがわかる。また、前部の A は終止・連体形である。

また、後部の A について述べると、形容詞の場合は「A も A」（いずれの A も終止・連体形）と「A も A ねか」（前部の A が終止・連体形で後部の A が否定形である）の形の 2 通り見られるが、動詞の場合は「A も A んか」（前部の A が終止・連体形で後部の A が否定形である）の形しか先行研究では見られなかった²。

「A も A ねか（んか）」の「ねか（んか）」について、詳しい説明をしている文献はなかった。しかし、直前が形容詞・動詞であることから、この「ね（ん）」は否定を表す「ない」で「か」は疑問の終助詞であり、対話において同意を求める際に用いられる用法が基本と考えられる。

次に、他方言との比較を行なう。形容詞を重ねて用いる方言は琉球語にも存在する。以下、衣畑・林（2014）の宮古島狩俣方言と横山（徳永）（2017）の奄美沖永良部国頭方言の例文を引用する。

(1) *nagaa naga nbas* .

長い 伸ばす

長く伸ばす。 (衣畑・林, 2014, p.32)

(2) *hada=wa kuru-guruu=tu hjikat-i=gadi u-N*

hada=wa kuru-kuru=tu hjikat-i=gadi u-N

肌 =TOP 黒い -RED=QT 光る -SEQ=TERM いる -IND

肌は黒々と光ってさえいる。 (横山（徳永）, 2017, p.191)

これらは「長い」と「黒い」を重複させる使い方を示している。しかしこれらの例は主に副詞的要素として用いられる。それに対して、本稿であつまっている「さみもさみ」構文は副詞的には用いられない。

また、間に「も」を挟み意味を強調する語は、名詞であれば共通語にも見られる。以下、『明鏡国語辞典 第二版』（2010）の見出し語「も」より引用する。

2 3.2.4 節で後述するように、本稿の調査では A が動詞の場合で「A も A」となる例が 2 例だけ見つかった。

- (3) 真ん中も真ん中、ど真ん中の好球だった
(4) 本当も本当、うそ偽りのない話だ (北原, 2010, p1716-1717)

しかし、今回取り上げる「さみもさみ」構文のように間に係助詞「も」を挟みながら形容詞・動詞を重複させる方言は、管見の限りいつの時代（古文含む）・地域にも確認できず、諸県方言でしか確認できない。やはり瀬戸山（1974）の言うように「都城・諸県方言の鹿児島とも異なる一大特徴」であるだろう。

3. 調査

3.1 概要

次に、「さみもさみ」構文について様々な観点から調査を行う。今回は記述式のアンケートによる調査を行った。調査項目は、使用の有無、後接する語、「AもA」のA部分に形容詞・動詞・形容動詞を当てはめたときの許容度などで、選択肢と記述欄を設けて回答してもらった。対象者37名の詳細は以下の通りである。

- 【出身地】 諸県方言地域 24名（都城市 14名、えびの市 3名、小林市 5名、三股町 2名）
日向方言地域 2名（西都市 1名、日南市 1名）
薩隅方言地域 11名（曾於市 1名、鹿屋市 3名、肝付町 1名、始良市 1名、鹿児島市 5名）
【年代別】 10代 1名、20代 3名、30代 2名、40代 5名、50代 12名、60代 7名、70代 3名、80代 3名、未回答 1名（西都市）

なお、今回回答いただいた諸県方言話者はほとんどが言語形成期を諸県地域で過ごしている。本稿はあくまでも諸県方言についての調査であるが、先に述べた通り鹿児島県にも近接する地域の方言であるため鹿児島県の方言との比較、また、近年諸県方言は日向方言化しているという先行研究（合原2012）が見られたため回答数は少ないが日向方言との比較をしつつ、諸県方言の特徴を考察する。

3.2 結果

3.2.1 使用状況（年代、地域）

まずは、「さみもさみ」構文の使用状況についてである。「さみもさみ」という表現を使うかという問いに対し、「使う」「意味は分かるが使わない」「意味が分からないので使わない」のどれかで答えてもらった。各地域の世代ごとの比率の結果は以下の通りである。括弧は実際の人数である。

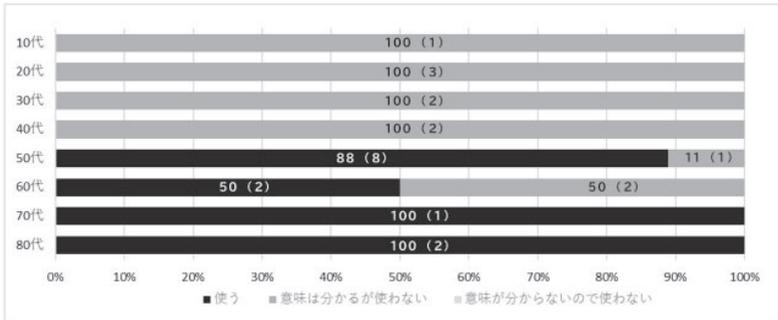


図1 諸県方言話者の使用状況

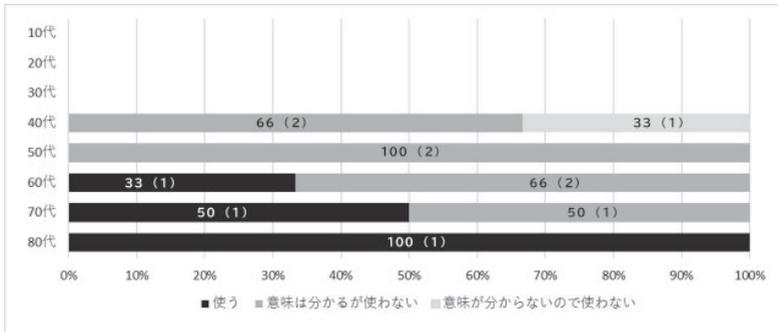


図2 薩隅方言話者の使用状況

日向方言話者	使う	意味は分かるが使わない	意味が分からないので使わない
日南市50代		○	
西都市未回答	○		

表4 日向方言話者の使用状況

この調査で「意味が分からない」と答えたのは始良市（鹿児島県）出身 40

代の方だけで、ほぼ全員が「さみもさみ」という言葉を聞いて意味が理解できていた。また、薩隅方言話者にも日向方言話者にも「使う」と答えた人がいた。つまり、この表現は諸県方言独自の一大特徴とはされているが、それより広い地域の話者にとっても馴染みがあるものといえるだろう。

また、図 1、2 を見ると「使う」と答えた人は 70 代から 80 代の人に顕著に見られ、40 代以下からは全く見られなくなった。以上のことから、この表現は若い人にも理解できるほど深く浸透しているが実際に使用するのは高齢者が中心であり、かなり消滅の危機に瀕している表現であるといえる。

3.2.2 接続

次に、「A も A」に後接する語に何があってその品詞を何なのかを調査する。今回は、「さみもさみ」（とても寒い）と「ぬきもぬき」（とても暑い）と「むじもむじ」（とても可愛い）を使って例文を作成してもらった。そして、集まった 75 個の例文を以下の通り分類した。例文の表記は、できる限りそのまま転写している。

接続	例（下線部の標準語訳）	出現数
終助詞	な（なあ） 6月でも屋間は <u>ぬきもぬきな</u> ～（とても暑いな～）	1
	が 今日は日が照るから <u>ぬきもぬき</u> が（とても暑いよ）	7
	ね 今日は <u>まごちさみもさみ</u> ね！（本当にとっても暑いね！）	10
	よ あの犬をみて！ <u>むじもむじ</u> よ（とても可愛いよ）	2
	ど <u>今日は厚着をしてきたかいぬきもぬきどー！！</u> （今日は厚着をしてきたからとても暑いよー！）	2
	かった（過去） 今年の夏は <u>ぬきもぬき</u> かった。（とても暑かった）	15
形容詞連用形 +補助助詞「し」 +接続助詞「て」	して <u>今朝はさみもさみ</u> して布団かい出がならなかったわ～ （今朝はとても寒くて布団から出られなかったわ～）	2
形容詞終止連体形 （終止用法）	近所の女の子は <u>むじもむじ</u> （とても可愛い）	32
形容詞終止連体形 （連体用法）	日 今日は <u>ぬきもぬき</u> 日じゃね（とても暑い日だね）	2
	所 <u>さみもさみ</u> 所には行ってみたいような、行きたくないような… （とても寒い所には）	1
	子 あん人の孫は <u>むじもむじ</u> 子じゃった（とても可愛い子だった）	1
合計		75

表5 「さみもさみ」構文に接続する語

最も多く見られたのは形容詞終止連体形の終止用法で、次は終助詞「かった」、

「ね」が多くみられた。以下の通り、いずれの例においても重語でなく「さみ」や「ぬき」単独でも接続できる。括弧内は標準語訳である。

- (5) 6月でも昼間はぬきな～ (6月でも昼間は暑いな～)
(5') 6月でも昼間はぬきもぬきな～ (6月でも昼間はとても暑いな～)
- (6) 今朝はさみして布団かい出がならなかったわ～
(今朝は寒くて布団から出られなかったわ～)
- (6') 今朝はさみもさみして布団かい出がならなかったわ～
(今朝はとても寒くて布団から出られなかったわ～)
- (7) 今日はぬき日じゃね (今日は暑い日だね)
(7') 今日はぬきもぬき日じゃね (今日はとても暑い日だね)

つまり、本稿で扱っている形容詞の「さみもさみ」構文は全体として「さみ」などと同じく1つの形容詞に準ずるものとして使われており³、活用形は終止連体形であると考ええる。

3.2.3 形容詞

本節では「さみもさみ」構文に使える形容詞と使えない形容詞の違いを意味的・形態的に考察していく。

まず、文献に見られた21例を種類ごとに分類したのが次の表である。

3 筆者の80代の祖母(都城市出身)の発話を聞く限り、アクセントの面では「AもA」は前部と後部に分かれ(Aも/A)、それぞれを宮崎県で広く分布する一型アクセントのピッチパターンで発音する。つまり、意味的には1つの形容詞として扱われるが、音韻的には2つに分かれている。

感情形容詞		属性形容詞	
2モーラ	ぬき (暑い)	2モーラ	ぬり (ぬるい)
	さみ (寒い)		ちけ (近い)
	こえ (きつい)		とひ (遠い)
	かい (痒い)		おし (遅い)
	ねみ (眠い)		はえ (早い)
	おじ (怖い)		うい (多い)
3モーラ	げんね (恥ずかしい)		むじ (可愛い)
	はがひ (はがゆい)		あけ (赤い)
4モーラ	とぜんね (寂しい)		あい (青い)
			しり (白い)
		3モーラ	みごち (美しい)
			つんて (冷たい)

表6 形容詞の種類

まず意味的には、21個の例を感情形容詞と属性形容詞に分けてみてもそれぞれ9例と12例になり、それほど偏りがあるわけではなかった。つまり、形容詞の意味的性質による使い分けはされていないようである。また、語の長さから見た場合には2モーラのものが多いものの、特に語の長さによる使用制限はないようである。

では、形容詞でありながら形容詞らしくないようなもの、すなわち、文法化が進んでいる語ではどうなのか。今回は次の2語の重語表現について調査してみた。1つは「ない」である。「ない」は単独で形容詞となるほかに動詞の未然形に後接する助動詞として、また、形容詞・形容動詞の連用形に後接する補助形容詞としての用法がある。2つ目は、「ほしい」である。「ほしい」も単独で形容詞となるほかに補助形容詞としての働きがある。

そして、「さみもさみ」構文に当てはめた「ないもない」と「ほしいもほしい」について、「使うし、聞く」(4点)、「使ったことはあるが、聞いたことはない」(3点)、「使ったことはないが、聞いたことはある」(2点)、「使えないし、聞いたこともない」(1点)という4つの答え方を用意し、それぞれに点数を付けて平均を出した。4に近いほど使用に違和感がなく、1に近いほどその単語での重語表現は違和感があるということになる。

調査の結果、「ない」の許容度は1.47で「ほしい」の許容度は2.06となった。また、「ない」については「使えないし、聞いたこともない」と回答した人が半数以上を占めているのに対し、「ほしい」では「使えないし、聞いたことも

ない」人と「聞いたことはある」人の間に1票しか差がなかったことから、「ない」より「ほしい」のほうが使用される機会はあるようだ。「ない」は不存在を表すので、強調してもその程度に差はなく不存在であることに変わりがない（＝ないものはない）ことから、使用する必要がないというのがこの差を生んでいるとも考えられる。しかし、少数であっても使ったことがある人も聞いたことがある人も存在した以上、「さみもさみ」構文に使うことができない形容詞は存在しないと言ってしまってよいかもしれない。それほどの生産性である。

ちなみに、「ないもない」とは少し違うが、濱田（1948）によると、

現代標準語では「ありもしない」と云ふべきところを、「ないもせぬ」と否定を二つ重ねて用いたもので、これは江戸語では「ねえもしねえ」の形になっている

とあり、「ないもしない」という表現は各地で散見されたようだ。「ありもしない」だと「あり」の部分の言葉の響きによって肯定的に感じ取れることもあるために生まれた表現であるらしい。しかし、これも後部のAの「ない」は助動詞であるため、諸県方言の「ないもない」とは異なる形である。

3.2.4 動詞

「さみもさみ」構文に使える動詞と使えない動詞の違いを考察していく。先ほど同様、文献に見られた例を分類したのが次の表である。動詞においても形態論的な偏りは見られなかった。

	動詞
2モーラ	かつ（書く）
	のん（飲む）
	とい（取る）
	ふい（降る）
	がい（叱る）
3モーラ	でくい（出来る；成績がいい）
	すべい（滑る）
	おらっ（叫ぶ）

表7 動詞の種類

また、先行研究においては、動詞には「AもAねか」の形しか見られない

という疑問点があったが、調査中に2つの例が見つかった。

まずは「のんものんだ」（とても飲んだ）である。これは文献に見られた「のんものまなか」についての聞き取り調査を行ったときに確認できたものである。このとき以外に文献や先行研究などで確認することはできなかったが、生まれてから一度も都城市以外に住んだことのない80代女性による発話であるため、信用に足る情報である。次に、「わるもわるた」（とても笑った）という形が確認できた。これは小林市の魅力を発信する「てなんど小林プロジェクト」⁴の一環で作られたLINEスタンプのデザインのひとつである。この「わるもわるた」についてもここでしか見られない語ではあるが、プロジェクトの運営が小林市市役所という公の機関であること、作成した時任友興さんは小林市細野出身者であるということから、信頼性は高い。

この2単語に共通していることは日常の中でよく使われることではないかと考える。まず、「飲む」については酒飲み文化が根付いていることが影響しているだろう。宮崎県には全国に誇る焼酎メーカーが存在し、「飲む方（のんかた）」（「飲み会」のこと⁵）という文化や「しょちゅくれ」、「しょちゅのんごろ」（「大酒のみ」のこと）という独自の言葉が存在する。国税庁の調査⁶によると、令和元年度の成人1人当たりの酒類販売（消費）数量において宮崎県は、「単式蒸留焼酎」は全国で2位、「その他の醸造酒等」では1位、全体の合計では2位を誇るほど、酒や焼酎の嗜好性が高い。そして、「笑う」は宮崎県に限らず、喜怒哀楽のうち喜と楽に共通するほど人間にとって重要な行為であり、LINEスタンプになるほど日常的によく使う言葉である。よって、この2語は会話の中で頻繁に登場する語であり、「たくさん飲んだ」や「めっちゃ笑った」のように程度の強調がされやすい語であるため、諸県方言において強調の重語表現の例として確認できたのではないかと考える。もっとも、動詞において「AもA」の形があまり見られず、使用頻度が高い動詞にだけ一部観察されるのは、「さみもさみ」構文の歴史的展開とも関係しているかもしれない。この「さみもさみ」構文がもともと動詞ではなく形容詞の方から発達したことを示唆するものではないだろうか。

4 てなんど小林プロジェクト…宮崎県小林市役所の企画政策課から2013年に発足した、地域の魅力を様々な形で発信するプロジェクト。「てなんど」とは、諸県方言で「一緒に」という意味の「てなむ」と地域資源のブランド化をしたいという思いの「ブランド」をつなぎ合わせた造語。ホームページ：<http://www.tenandoproject.com/>（2022.1.5 閲覧）

5 瀬戸山（1992）

6 国税庁課税部 酒税課・輸出促進室（2021）

さらに今回の調査では、動詞としての用法と直前に動詞の連用形が来る補助動詞としての用法を持つ「ある」と、同じく動詞と補助動詞としての用法を持つだけでなく同音異義語が多い「いる」（「要る」）という、ある意味で特殊な動詞についても重語表現が使えるかどうかを聞いてみた。結果は以下の表のとおりである。

あるもある	人数	点数
使うし、聞く	1	4
使ったことはあるが、聞いたことはない	0	0
使ったことはないが、聞いたことはある	8	16
使えないし、聞いたこともない	27	27
計	36	47
平均		1.31

表8 「あるもある」の許容度

いるもいる	人数	点数
使うし、聞く	2	8
使ったことはあるが、聞いたことはない	0	0
使ったことはないが、聞いたことはある	4	8
使えないし、聞いたこともない	30	30
計	36	46
平均		1.28

表9 「いるもいる」の許容度

いずれも過半数が「使えないし、聞いたこともない」と回答している。

これは先ほどの動詞「飲む」や「笑う」に比べて日常的にそれほど言うシチュエーションがなく、イメージが湧かなかつたからではないかと考える。この2つの動詞について「使う」と答えた3名はそれぞれ別人であるが、共通しているのは40代以上の諸県方言話者だということである。先行研究や3.2.1節の結果から諸県方言は薩隅方言と日向方言との境界があいまいになっているというような見方があるわけだが、動詞の重語表現については、諸県方言独自で発展した表現といえるかもしれない。すなわち、上でも述べたことと関係するが、「さみもさみ」構文というのは最初に形容詞から発達し、動詞を用いたものについては諸県方言でより発達したと言えるのではないか。

3.2.5 形容動詞

形容動詞については、文献において重語表現に関する記述が一切見られなかった。しかし、形容動詞は「ナ形容詞」と呼ばれることもあり、物事の性質や状態を表す語として形容詞と同じような働きをする品詞である。では、諸県方言の重語表現において使用することは可能であるのかと疑問に思った。そこで、日常で使いやすい「好き」と「嫌い」、2 モーラ・3 モーラ・4 モーラの「楽」、「丈夫」、「にぎやか」という5つの形容動詞について質問してみた。結果は以下の表のとおりである。

すきもすき	人数	点数
使うし、聞く	7	28
使ったことはあるが、聞いたことはない	1	3
使ったことはないが、聞いたことはある	16	32
使えないし、聞いたこともない	12	12
計	36	75
平均		2.08

表10 「すきもすき」の許容度

きらいもきらい	人数	点数
使うし、聞く	4	16
使ったことはあるが、聞いたことはない	0	0
使ったことはないが、聞いたことはある	6	12
使えないし、聞いたこともない	26	26
計	36	54
平均		1.50

表11 「きらいもきらい」の許容度

らくもらく	人数	点数
使うし、聞く	14	56
使ったことはあるが、聞いたことはない	1	3
使ったことはないが、聞いたことはある	11	22
使えないし、聞いたこともない	10	10
計	36	91
平均		2.53

表 12 「らくもらく」の許容度

じょうぶもじょうぶ	人数	点数
使うし、聞く	4	16
使ったことはあるが、聞いたことはない	1	3
使ったことはないが、聞いたことはある	9	18
使えないし、聞いたこともない	22	22
計	36	59
平均		1.64

表 13 「じょうぶもじょうぶ」の許容度

にぎやかにもぎやか	人数	点数
使うし、聞く	7	28
使ったことはあるが、聞いたことはない	0	0
使ったことはないが、聞いたことはある	8	16
使えないし、聞いたこともない	21	21
計	36	65
平均		1.81

表 14 「にぎやかにもぎやか」の許容度

まず「好き」と「嫌い」の2つを見てみると、「好き」のほうが使用されることがあるようである。対極にある語でこれほど差が出たことは意外に感じた。対象を否定する「嫌い」より好意的な意思を示す「好き」の方が口に出しやすいからであるだろうか。

次に「楽」、「丈夫」、「にぎやか」の中では、「使えないし、聞いたこともない」と答えたのが半数以下だったのは「楽」のみだった。3.2.3節で述べた通り文

献でも2モーラのもが多くみられているところから、モーラ数は重語表現の使いやすさにわずかながら影響を与えている可能性があり、リズムが関係するかもしれない。そうだとすると、「嫌い」ではなく「いや」であったらより受容されていたのかもしれないが、調査が及ばなかった。

また、今回の形容動詞の5つの例において、動詞の「ある」「いる」よりもすべて許容度が高かった。加えて、「使うし、聞く」と回答した人も一定数確認できた。文献においては形容詞と動詞のみしか諸県方言の重語表現において言及されていなかったが、そこに形容動詞も加えることができると考える。これも調査が及んでいないが、「名詞+も+名詞」の形はないことから、おそらくは意味が名詞寄りに捉えられるものより形容詞寄りに捉えられるものの許容度が上がるだろう。上で「楽」の許容度が低かったのもそれと関係しているかもしれない。

3.2.6 「AもAねか(んか)」

先行研究においては、「AもAねか(んか)」の形が多く見られた。Aが動詞の場合にはこの形しか見られなかったほどである。しかし、「ねか(んか)」の部分についての詳しい説明が見られなかったことから、実際に使うことができるのか、耳にしたときに理解することができるのかを疑問に思い、調査した。今回は文献に見られた「ぬきもぬきねか」(とても暑くないか)、「つんてもつんてねか」(とても冷たくないか)、「はしいもはしらんか」(とても走らないか)の3例を直訳してもらった。

結果、形容詞「ぬきもぬきねか」と「つんてもつんてねか」では、比較的、標準語訳に近い答えが見られた。しかし、動詞においては、「ものすごいスピードで走る」や「一生懸命走れ」、「急いで走ってくれませんか？」など用法の違いが多く、標準語訳に近い答えは1例しか見られなかった。

これは「ぬきもぬきねか」が「とても暑くないか」になったり「つんてもつんてねか」が「とても冷たくないか」になったりするのは違い、直感的に違和感のない訳にすることが困難であることが原因ではないかと考えられる。その他の動詞の「といとらんか」(とても取らないか)や「かっもかかんか」(とても書かないか)も同様である。

また、この質問は他と比べ未回答が多かったことから、先行研究において動詞の重語表現はこの「AもAねか(んか)」の形しか見られなかったが、諸県方言話者でも訳しにくい表現ではないかと推測する。

3.2.7 その他の例

最後に、先行研究では見られなかった用例を挙げておく。

重語表現	訳		
あちもあち	とても熱い	ないもない	とても（植物などが）なる
いてもいて	とても痛い	なげもなげ	とても長い
うめもうめ	とても美味しい	ひりもひり	とても広い
おみもおみ	とても重い	ふてもふて	とても大きい
かてもかて	とてもかたい	まじもまじ	とてもまずい
かりもかり	とても軽い	やえもやえ	とてもやわらかい
かれもかれ	とてもからい	やしもやし	とても安い
きちもきち	とてもきつい（疲れた）	よえもよえ	とても弱い
くせもくせ	とてもくさい	よかもよか	とても良い
こいもこい	とても濃い	ぐらしもぐらし	とてもかわいそう
こめもこめ	とても小さい	だるいもだるい	とてもだるい（疲れた）
ずりもずり	とてもずるい	よだきもよだき	とても面倒くさい
せめもせめ	とても狭い	せからしもせからし	とてもうるさい
たけもたけ	とても高い	やぜろしもやぜろし	とてもうるさい
つえもつえ	とても強い	あつたらしもあつたらし	とてももったいない

表 15 その他の例

これら例の中で動詞は「とても（植物などが）なる」の一つだけで、あとはすべて形容詞だった。また、形容詞 29 例中 23 例が 2 モーラのものであった。これらはこれまで 3.2.4 節と 3.2.5 節で考察したように、「さみもさみ」構文において動詞より形容詞の方が定着していることや、モーラ数が少ないほうが使いやすい可能性があることが原因であると考えられるだろう。

3.2.3 節で「ない」（無い）の許容度が低かったのは、諸県方言における同音異義語の動詞「ない」（「生る（なる）」の意）の存在もあるのかもしれないが、推測の域を出ない。

4. おわりに

最後に、本稿を通して得られた「さみもさみ」構文の分析結果をまとめる。全体として、諸県方言の“一大特徴”である「さみもさみ」構文についての記述はある程度は進めることができたと考えている。

まず、「さみもさみ」構文は諸県方言地域のみならず、日向方言地域や薩隅方言地域でも理解される地域があるが、使用しているのは 70、80 代が中心で

あるため、今後は衰退の一途をたどると予想される。

次に、「さみもさみ」構文は全体で1つの形容詞として扱われる。「AもA」の「A」と「も」の間に助詞などを挟むこともできない。ただし、活用については終止連体形しか確認されていない。一方で、本稿では脚注3で少し触れただけだが、「AもA」を複数のアクセント単位に分けて発音する話者（都城市出身80代女性）を確認しており、形態統語的な視点と音韻的な視点ではミスマッチが生じている場合があるようである。「さみもさみ」構文のアクセントについては詳細な調査をしていないため今後の課題である。

また、意味的にはどんな形容詞でも重語表現として成立させることがおそらくは可能である。形容動詞の重語表現も話者にとっては受け入れやすいものであるということが分かった。しかし、今回文献に挙げられた例が全て（あるいは多く）の話者にとって使用できるものかまでは確認できていない。より慎重で詳細な調査・分析が必要である。

形態的には、先行研究で挙がっている例と今回新たに見られた例のどちらも「A」が2モーラのものが多い傾向にあった。リズムが関係する可能性が残っているが調査が及ばなかった。

最後に、「AもAねか（んか）」について、先行研究において動詞の重語表現にはこの形しか見られないが、形容詞に比べると動詞における生産性は低いように思われる。これは歴史的な発達過程と関係している可能性があり、この重語表現が最初に形容詞から発達したということを示唆しているという仮説が成り立つ。

【引用・参考文献】

- 市園辰夫（1987）『諸県の方言』私家版。
衣畑智秀・林由華（2014）「琉球語宮古狩俣方言の音韻と文法」『琉球の方言』38, 17-49。
岩本実（1983）「10. 宮崎の方言」飯豊毅一ほか編『講座方言学9－九州地方の方言－』国書刊行会。
桑畑初也（2011）『第四 三股の研究－みまた言葉の単語と句－』私家版。
合原加奈美（2012）「宮崎県東諸の方言について」『語文論叢』27, 20-43。
北原保雄 編（2010）『明鏡国語辞典』第二版, 大修館書店, 1716-1717。
白坂安（2016）『薩摩ことば [加久藤地区]』鈺脈社。
瀬戸山計佐儀（1974）『都城方言集』都城史談会。
瀬戸山計佐儀（1992）『都城さつま方言辞典』三州文化社。

玉木徹志・田代学 編 (2006) 『新宮崎市方言辞典』 江南書房。
濱田敦 (1948) 「肯定と否定－うちとそと－」 『国語学』 第1輯, 54-55。
早野慎吾 (2011) 『宮崎ことばの散歩道 ずんだれ編』 鈺脈社。
原田種夫ほか (1982) 『九州方言考 *ことばの系譜』 読売新聞社。
松永修一・上杉宗聖 編 (2000) 『ぼきゃぶら BOOK やっちゃん宮崎人』 鈺脈社。
南日本新聞社 編 (1984) 『かごしま弁 南九州の言葉と風土』 筑摩書房。
横山 (徳永) 晶子 (2017) 『琉球沖永良部国頭方言の文法』 博士論文, 一橋大学。

国税庁課税部 酒税課・輸出促進室 (2021) 「酒のしおり」

<https://www.nta.go.jp/taxes/sake/shiori-gaikyo/shiori/2021/pdf/000.pdf> (2022.1.5 閲覧)

てなんど小林プロジェクト 「西諸弁スタンプ」

http://www.tenandoproject.com/collaboration_product/%E8%A5%BF%E8%AB%B8%E5%BC%81%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%B3%E3%83%97 (2022.1.5 閲覧)

【謝辞】

本稿は筆者が熊本県立大学文学部に提出した卒業論文に加筆・修正したものです。アンケートにご協力いただいた方々にも心より感謝申し上げます。また、ご指導を頂いた小川晋史先生に深く感謝申し上げます。